

周易抄についての國語學的考察

鈴木 博

一

この小稿は、室町時代に柏舟宗趙が講じた周易抄の古寫本の中で、主として建仁寺兩足院藏本（以下A本という）と土井忠生博士藏本（以下B本という）とを國語學的立場から比較したものの一端である。柏舟の講じた周易抄の諸本の所在については、足利衍述氏『鎌倉室町時代の儒教』・「抄物目錄(1)」〔『國語國文』28年10月〕・阿部隆一氏「天理圖書館藏室町時代邦人撰述漢籍注釋書類について」〔『ビブリア』35年6月〕などに、ほぼ挙げられている。いま卑見のもとにまとめると次のとおりである。

- ①兩足院藏 二跋本 六卷六冊
- ②慶應義塾圖書館藏 二跋本
- ③國會圖書館藏 二跋本 六卷六冊
- ④天理圖書館藏 二跋本 四卷（卷一・卷四）二冊
- ⑤京大國文研究室藏 二跋本 二卷（卷五・六）一冊 前掲④と一體のもの

- ⑤成實堂文庫藏 二跋本 六卷三冊
- ⑥國會圖書館藏 一跋本 六卷合三冊
- ⑦東京教育大學藏 無跋本
- ⑧大東急記念文庫藏 無跋本 六卷六冊
- ⑨慶大斯道文庫藏 無跋本
- ⑩成實堂文庫藏 六卷六冊
- ⑪國會圖書館藏 第一增補本 元龜四年寫 六卷合三冊
- ⑫足利學校遺跡圖書館藏 第二增補本 慶長中寫 六卷三冊
- ⑬天理圖書館藏（橋本進吉博士旧藏）第二增補本 六卷六冊
- ⑭土井忠生博士藏 第二增補本 六卷六冊
- ⑮京大圖書館藏 四冊（卷一・四・五・六） 柏舟原本と増補本との混合したもので卷三缺。卷二は清原宣賢自筆の講抄本で、これは天理圖書館藏の九冊と合わせて全卷揃いとなる。
- ⑯内閣文庫藏 古活字版無跋本 六卷六冊
- ⑰叡山文庫藏 古活字版無跋本 六卷合三冊
- ⑱慈眼堂藏 古活字版無跋本

右の中⑯～⑱の古活字版を除けばすべて寫本である。二跋本というのは卷尾に次の柏舟の識語二篇を有するものである。

文明丁酉十月廿一日始之、十一月十七日終之、自到終、与景徐麟藏主講罷校讎、夜以繼日、余過半聽瑩閣筆者多、到節角處、令景徐連誦數過、或添或削、蓋余所筆乃景徐所筆也、而義理之異、烏焉之同、後之見者、正其誤、可也

予昔於武州箕田縣、就希禪々師學易、時三十一歲也、今以余所學易、并三ヶ秘訣、盡以奉授 小補与景徐老、無餘蘊矣、蓋余易 小補之易也、第恐所聞寡陋、不適小補之意也、

文明丁酉十一月廿七日 柏舟叟宗趙

右は①のA本に據つたのであるが、本によつては一、二文字の相違するものがある。阿部氏は二跋本の筆頭に⑤の成簣堂文庫藏本を掲げられたけれども、果たして跋文二つが存するか否か、まだこれを現藏するお茶の水圖書館から閱覽の機を與えられないので確認し得ない。『成簣堂善本書目』23ゝ24頁によれば、⑤は撰者（すなわち柏舟）自筆の由であるけれども、示されている識語は後の方だけである。そして左の傍線部のように字の違つている個所がある。

予昔於武州箕田縣、就希禪^a之師、學易、時三十一歲也、今以余所學易并三ヶ秘訣、盡以奉傳^{b c}於 小補翁与景徐老^d无餘^e瀟^e矣、蓋余易小補之易也、第恐所聞寡不陋適小補之意也、

文明丁酉十一月廿一日^f 柏舟叟宗趙

この後の方の跋文だけをもつ前掲⑥の一跋本——阿部氏は二跋の中の後の方を缺くのを一跋本のように記されているが、これは誤りである——を見ると、b c dは一致する。しかしfは、⑥では「文明丁酉拾一月廿七日」とあつて①と一致している。④でも「廿七日」であつて——④はほとんど①と一致するけれども、b cの個所は「奉於」

とあり、「於」の左傍に・とし、そして右傍に小さく「授」と記している——⑤が①よりもまさる本文を有するかどうかは、將來の研究に待たなければならぬ。それはともあれ、この跋文によつて、柏舟が足利學校において希禪々師（A一44ウに「喜禪」とあるのと同じ人）から易を學び（三十一歳）、のち文明九年（一四七七）に（近江山上の曹源寺で）易と秘訣とを小補（横川）・景徐に傳授したこと、ならびにこの抄が主として景徐の筆録にかかるものであることなどが知られる（柏舟については『鎌倉室町時代の儒教』六三四頁以下に述べられている）。

さて①～⑩（および⑬～⑮）の原本系に對して、⑪～⑭は足利氏のいわゆる増補本系である。増補本系には抄文の増補改變が見られる。たとえばA本に

吁^アハヤンノトヨムソ、物ヨウケゴハイテ物怪カナト云心ソ（A四45オ）

とあり、④でも同様にあるが、B本では

吁ハ
 ヨンノト云ハモノヨウケコワヌ辭尙書ニ堯曰ヨンノトアルゾ
 （B四43オ）

とあり、双行に記された部分の右側が増補されている。特に注目すべきは、原本系が濁點をほとんど打たないのに比して増補本系がきわめて豊富に濁點を施していることであつて、濁點が豊富に施されている抄物が数少ない點からして、増補本系のかかる状態は國語學的になかなか有益である。たとえば

父ノ心モマツカウデアラウド心得テセウゾ（B二22ウ）

の傍線部のように、格助詞「と」や接續助詞「て」などが長音の下についた時は、たいてい濁點が施されていて連濁現象をおこなっていたことが認められる（土井博士『日本語の歴史』一六一頁参照）。また『大辭典』（平凡社）では清

音形で標出されている動詞「サチガク」が、B本などからの證例によつて濁音形と考えられることは、かつて述べたごとくである（拙稿「四河入海について」——『國語國文』41年5月）。その他、助詞「コソ」および禁止表現の「ナ……ソ」の場合の「ソ」に濁點を施したものが見られる。例を挙げると、

澤ハ水ガアツテコゾナレ、ヒカワイテ水ノナイハ困シタナリゾ（B 517オ）

君子ハ險難ナ處ヘハナ進ミゾ（B 444ウ）

これらは誤濁と見るには用例が多すぎる。のみならず、このような「コゾ」や「ナ……ゾ」の例は他の抄物にも見受けられるのであつて、あながちB本の特異な現象ではない。本文冒頭に「天文第五丙申八一五三六〇正月廿九日外記環翠軒講焉」とある清原宣賢講抄の『日本書紀抄』（佛教大學國文研究室藏。外題「環翠抄上」。義應の筆）と、永祿十二年八一五六九〇文之玄昌自筆の『襟帶集』（成賞堂叢書）とから左に引こう。

ナ御覽ジゾト云タルニ情コワニ御覽シタル心ヲ見タル也（環翠抄34ウ）

蝸牛カ出入スルコゾ圓通ニ出入シタヨ（襟帶集、本文17オ）

「こそ」の語源に關しては、「コ||此、ソ||ゾ」という石田春昭氏の説があり（「コツケレ形式の本義（下）」——『國語と國文學』14年3月、また「な……そ」の「そ」についても係助詞「ぞ」と同質のものという見方がある（木枝増一氏『高等國文法要説品詞篇』四七一頁）。とすれば「コゾ」や「ナ……ゾ」の存在も本源的には敢えて異とするに足りないということになるかも知れない。しかしまた、B本の「ヤマスシテ尙ヲモ行ハウドセバワルカラウゾ」（B 518オ）のような場合には、これと同様に濁っている⑮の京大藏本が、「コソ」や「ナ……ソ」では濁點を施していないことから考えると、やはり濁音の「コゾ」や「ナ……ゾ」はあまり普遍的な現象でもなかつたように思われる。ある

範圍に限つて行なわれたのではないかと想像される。

B本は次引のように横川禪師の説や一柏上人の説などが散見するので、足利氏の分類に従えば第二増補本に屬すると考えられる。ちなみに足利氏は第一増補本の増補者は横川かあるいはその徒と推測され、これをさらに増補した第二増補本の増補者は、足利學校の關係者であろうと推測しておられる（前掲書八五六頁）。

横川曰孔子ノ尋常八象ハ先ツ卦ノ名ヲ云テ其後重明カラ卦ノ德ヲ云、嘆美ガ先ツ出ダセタゾ（B 36ウ）

一拍ノ抄ニ念比ニ每卦アレドモアマリクドイ程ニカキクワヘヌゾ（B 431ウ）

右の前者については、しかしながら原本系のA本（三55オ）にも、また④にも、はじめの「横川曰」がないだけで同様の文があり、足利氏の言う第一増補の具體的裏付けを、増補本系に「川曰」「川云」「川義」「川」などである個所について一々原本系と當たることによつて、求め確める必要があるようである。後者の一柏説については、また

先天後天并河圖洛書之圖大衍數等、一白啓蒙ノ抄ニ詳也（B 11オ）

等のようにも引例されているが、この「一白啓蒙ノ抄」というのは『易學啓蒙通釋口義』（京大圖書館清家文庫に全七冊中の卷二の一冊だけが所藏。一柏講、月舟聞書、宣賢筆。ほとんど漢文体）のごときかと思われる。一柏の講が行なわれたのは永正十一年（一五一四）の頃のようにで（尾道短大國文研究室編『京大附屬圖書館藏本漢書列傳竺桃抄』の大塚光信氏解題九頁）、したがつて第二増補本の成立はそれ以後となるであらう。

A本とB本との抄文を比較して見いだされる相違のうち、國語學的に問題となる才段長音の開合と二段活用動詞の一段化とを主として取上げようと思う。

四つがなについての混同は見られないけれども才段長音の開合の混同かと思われるものが、B本に——全體の比率の上からは僅少であるけれども——幾つか見られる。しかしその個所をA本に就いて當たつてみると、すべて混同と言ふを得ないのである。對比して示そう。

まずB本において開音を合音のように記しているものは次のとおりである。

此卦ニアタラハ我カワルウテ恥ヲカ、ウソ (A 54ウ)

此卦ニ當ラバ我ガワルウテ恥ヲカコウゾ (B 53オ)

上ヘ奉公セウトハ云ハイテ下ヲ養ハウスコトハカリヨスルホトニ (A 39ウ)

上ヘ奉公セイデトハ云ハイデ下ヲ養ナヨウス事バカリヨスル程ニ (B 26オ)

イカニ行ナハウトスルトモ叶マイソ (A 30オ)

イカニ行ヲウトスルトモ叶マイゾ (B 20オ)

是非ニツケテ三ト争ソワウト云ホトニソ (A 15オ)

是非ニツケテ三ト争ヲウト云程ニゾ (B 11オ)

惡心ヲ起シテ天下ヲモトラウソ (A 54ウ)

惡ヲ起シテ天下ヲモトウドセウゾ (B 10ウ)

物ノ命ヲモラサヌソ (A二16ウ)

物ノ命ヲモヨサヌソ (B二11ウ)

最後例は、④でもA本と同様に「天ノ四時春夏秋冬ノ徳カアツテモノヲモラサヌ様ニステヌソ、物ノ命ヲモラサヌソ」とあつて、B本は誤寫の疑いが濃厚である（その直前の例は④では「惡ヲ起シテ天下ヲモトラウトセウソ」とあつて、問題の個所はA本と同じであるが、他はB本と同じところもあつて、いわば中間形を呈している）。が、これを除けば、B本における混同例は、すべて四段活用動詞の未然形に、推量・意志の意の助動詞「う（うず）」が接續する場合、その未然形の語尾のア段音が後續音と融合して開長音になるはずなのに、それをオ段音のかなで書いているのである。

次にこれとは逆に、B本において合音を開音のごとくに記しているものを示そう。こちらの混同例の方がやや数が少ない。

内卦ニヒツコウテイタホトニ所見カセハイソ (A二46ウ)

居ニ内卦ニヒツカウデイタ程ニ所見ガセバイゾ (B二31ウ)

四ヲタノウテイタソ、柔邪テヨツテ人ヲタノウテ媚ヒヘツラウソ (A四53ウ)

四ヲタナウデイタゾ、柔邪デヨツテ人ヲ頼テ媚諂ヒラウゾ (B四52オ)

物トハヒロウ云ヘトモ此ハ天子ヨ云ソ (A四22ウ)

物トハ廣ヒラウウ云ヘドモ此ハ天子ヨ云ゾ (B四23ウ)

アラシヨウヤトテコ、テ腹ヲ立テイテ…… (A五15ウ)

アラシヤウシヤト云テ此テ腹ヲ立イデイテ…… (B五11オ)

はじめの二例は、マ行四段動詞の連用形がウ音便（長音便）化しているもので、語幹末が才段音であるので當然合長音に記せられるはずであるけれども、B本では開長音かのように書かれている。最後例は、京大藏の㊟もA本と同じなので、B本に誤寫の疑いもあるけれども、それはそれとして、「笑止」のつもりで書かれたとしても、

コワイ敵ヂヤホドニセウシカナ、ナマシイゴトヲシテワルウセハアテラレウステナクゾ（B六37ウ）

のように、合音に記されるべきである。A本のような「アラ、シヨウヤ」のつもりで書かれたとしても、もちろん合音に書くのが正しいのであつて、いずれにせよ、B本のこの個所は開合を混同しているわけである。「アラシヨウヤ」は、「ああ、しょうがないよ」「ああ、つまらないよ」というような意味であつて、湯澤幸吉郎博士『國語學論考』一二六頁以下に説かれており、B本の次例などでも正しく合音に記されている。

此ハ九四ガナリハ我身一身ハアラシヨウヤト云テカイ計ッテイウツイウハワルイゾ（B六46オ）

ところで開合の混亂例は宣賢眞筆のものにも見られる。おそらく宣賢の據つたものに、すでに混亂があつたのであろう。天理圖書館藏の④は卷一・四の末に筆太にそれぞれ「右宣賢卿眞筆也 加證明訖 弘化四年十一月九日 卜部良芳」・「宣賢卿眞筆也 加修補畢 弘化四丁歲十一月十日 從三位侍從卜部良芳」とあり（卷二の末には「加修補畢 弘化四丁未歲 從三位侍從卜部良芳」とあるが、卷三の末には何も無い）、卷一・二・四（第一冊全部と第二冊の後半）は清原宣賢の筆と認められる（ついでに京大藏の㊟は、表紙に墨書されている所收の卦の名と「宗趙柏舟講 小補軒横川抄 此講句々有誤可依用正義」の文字は、④と同様に宣賢筆と考えられる）。そして轉寫した抄文に間々「」を施して批判を加えている。たとえば、B本では

夫子トヨメバ孔子ニマギレテワルイゾ、此ハ只ヲトコト云心デ夫子トヨウダガヨイゾ、我が習タ師ノ云ゾ（B

12ウ)

とあるだけであるが、④ではこの文の前後に「」をして、右横に「此義甚不可ナリ」と宣賢筆で書入れている。その宣賢自筆本に次の混同例が見られる。

今時ナラハソンテウ其人ニヨン目ニカ、ツタト云心ソ (四40オ)

右は古活字版本も全く同様であり、また⑥の一跋本も

今時ナラハソンテウ其人ニ御目ニカ、ツタト云心ソ (四40オ)

と混同している。しかしA本(四39ウ)は後掲のB本のように正しく記されており、また⑩の巻末に「元龜四年ハ一五七三〽癸酉卯月廿八日書畢」とある第一増補本でも、正しく

今時ナラバソンデヤウ其人ニヨン目ニカ、ツタト云心ソ (四44ウ)

とある。B本は

今時ナラバソンデヤウ其人ニ御目ニカ、ツタト云心ゾ (B四38ウ)

と正しい。「そんちやう」は、「その」「そこ」等の上に冠して實名を明示しないような場合に使われる。中近世にわたつて用例が見られるが、時代が降ると開音が合音になつたり、ヂヤ行音がジャ行音になつたり、長音が短音になつたりしているようである。抄物にもしばしば用いられているが、平家物語(百二十句本)の用例を左に引こう。

さためていまはうちてをむけられ候はんすらん。三井寺ほうしわたなへにはそんちやうそれなんとそ候らめ。き

おうはゑりうちなんとつかまつるへふ候(京都府立総合資料館蔵本、第34句。高倉の宮の臣であつた競が、平宗盛に向

かつて馬を請う場面での詞)

「そんぢやう」の語源に關しては諸説がある。『和訓栞』の「ソレトイフ」説に據つた湯澤博士説は、開合混同という大きな難點のあることが土井博士によつて指摘されている（『國語學論考』書評——『國語と國文學』15年8月）。上田萬年博士・樋口慶千代氏の『近松語彙』では、湯澤博士の斥けられた「尊丈」説を採つてゐる。が、従いがたい點が存する。菊澤季生氏は「ソン（其）といふのはソノの訛つたものか」（『國語研究』14年11月）と述べられた。「そんぢやう」という語が主として「そ」系統の代名詞の上に冠せられることから考えれば、「そんぢやう」の「そ」は代名詞の「そ」と同じ性質のもののように思われ、語源は「その定^{ぢやう}」かと考えられる。なお保科孝一氏は「五山言葉かも知れない」（新潮社『日本文學講座I』54頁）と言われたが、平家物語以外に義經記などにも見え、抄物においてもたとえば「環翠神代抄」と外題のある靜嘉堂文庫藏の寫本に

ソンチャウソノヨンコト、云心ソ（一）

のように見えるので、五山言葉とは限定できまいと思われる。

三

二段活用動詞が一段活用化している用例について述べる。B本には下二段動詞が下一段化している例が若干見られるのであるが、A本に就いて見ると、そのほとんどは古格を保つて二段活用をしている。A本、B本ともに下一段化していると認められる動詞は、次例の「ヘル」（經）である。

曆ハ根本ハ此ニカイタ歴ノ字ソ、ヘルトヨムソ……ヘルトハ一日二日三日トヘ正月二月三月トヘル心ソ（A
五37オ）

曆ハ根本ハ此ニカイタ歴ノ字ソ、ヘルト云ゾ……ヘルトハ一日二日トヘ正月二月トヘル心ゾ（B五26ウ）

この語は、當時は下一段活用と考えられていたようであつて、黒本本節用集や兩足院本節用集などでも「經」である。

次に示す用例では、A本は下二段、B本は下一段である。

初九ハマタ初心テワタリカヌルソ (A六49オ)

初九ノナリハマダ初心デワタリカネルゾ (B六51オ)

人カサユル共大事モアルマイソ (A三35ウ)

人ガサヘルトモ大事モアルマイゾ (B三23ウ)

无攸——ナヲモイマシムルソ (A五64ウ)

无攸レ利トハナヲモ戒メルゾ (B五46オ)

善惡ハカワレトモ大極ハモトノマ、ソ (A三18オ)

善惡ハカケルトモ大極ハモトノマ、ゾ (B三11ウ)

最後例は、④も全くA本と同じなので、B本はおそらく誤寫であろう。しかし第一例のごときは、④はA本と同様に下二段の「カヌル」であるが、⑤はB本と同様に下一段の「カネル」であつて、増補本系に下一段化の傾向が看取される。「ネ」の字體が「子」であるところから「ヌ」との字形の紛れも生じやすかつたであらうけれども、しかし下一段化しているものが他にも存するからには、やはり單純な誤寫とすべきではあるまいと思われる(ただし同じ動詞であつても下二段活用をしている場合もある。たとえば、B六51オでは「マダ難が残テ渉ルハ水ヲ渉ルニ渉リカヌルヤウナゾ」のようにあつて、この点⑤も同様に下二段である)。

ところでA本に存しない、オ段長音の開合の混同や下二段活用の下一段化が、B本に比率上は僅少なながらも見られるということは、何によるのであろうか。B本が第二増補本に屬し、第二増補者が足利學校の關係者らしいことがこのことにもしも關連してくるのであれば、これら（あるいは「ゴゾ」や「ナ……ソ」のごときをまで含むか）は、東國語の影響ということになるであらう。しかし宣賢の轉寫したものにも、前述のごとき開合の混同例が見いだされるので、東國語系の介入を重視するよりも、時代の流れが反映していると見た方がよいのではないかと思われる。B本に

古法ヲ行ナウハ人ガウケガイヤスイゾ、新法ヲ變スルヲバチャト人ガウケガワヌゾ（B五25オ）
とある動詞「うけがふ」が、また

三公ニ物ヲ申トモゲニモトウケゴワレウゾ（B四63オ）
物ヲ改ル事ヲバ人ガチャットウケゴワヌゾ（B五25オ）

のようにも記されている。これは終止（連體）形の「うけがふ」に開合の混同が生じ、ために語幹が「うけご」であるかのように思い込まれたところから生じた表記と見られるのであるが、じつはA本でも「ウケコハレウソ」（四66オ）・「ウケコハヌソ」（五35オ）とあつて、原本系からすでに開合混同の徴證がほのかに見えるのである。

他の抄物においても、兩足院藏の『四河入海』に「肯ア（テト）云字ハウケカウテ行心ソ」（二一末13ウ）とある傍線部が、

古活字版には「ウケコウテ」とあつて、もしも東福寺藏本——大永七年（一五二七）頃から天文二年（一五三三）頃へかけての笑雲自筆本かとされる——に、この卷が現存しておれば、おそらく古活字版と同様に記されているのではないかと推測される。また『五本對照改編節用集』によれば、『饅頭屋本』に「ウケガウ」と共に「ウケゴウ」も

載っている。柏舟は二十五歳の時に笈を負つて足利學校にはいり七年間研學したという。柏舟の講述に東國語脈の混入する可能性もあるが、なお一そう詳しく諸本間の異同を調べた上で推論することとしたい（管見に入る範圍ではA本が最善本と信じられるけれども、A本にある行間の書入れ——例えば六47オの6・7行目の間に約五十字ほど書込まれているがごとき——で、④には全く記されていないものがあり、A本が原初の姿のままではあるまいと思われる）。

四

湯澤博士『室町時代の言語研究』（以下『室』という）において用例未見の旨を述べられたもののうち、柏舟の周易抄から例出できるものを示すと、以下のとおりである。

(1) 「ナ……ソ」がカ變・サ變の動詞を挿む時はその未然形を取るけれども、抄物では、サ變は連用形に變つてしまつてゐる。そしてカ變の適例は未見であるという旨が『室』二九四頁に述べられている。本抄にカ變も連用形を挿んでいる例が見られる。

クルヲ不_レ距シテナキソトモ云ハヌゾ（B三22ウ。A34オも同文）

(2) 『室』二一〇頁に已然形の「ツベケレ」の適例が見当たらないとある。本抄には次の用例が存する。B本に

代々ノ親ヲ考ト云ツベケレドモ周公ノシタヲ不_レ改ゾ（B二19オ）

とあり、A本でもほぼ同様に

考ハ代々ヲヤヲ云ツヘケレトモ周公ノシタヲ不_レ改ゾ（A二27ウ）

とある。

(3) 『室』一四四頁に、「ウズル」を終止形に用いた例が見當たらぬとある。すでに大塚氏「ウズとウズル」(『國語國文』31年9月)に、他抄からの用例とともに引かれているが、B本に左の例がある。

君トハ九五ニツカハレテヤツハリソコニイウズルト云心アル程ニ貞吉ゾ(B二五ウ)
ただしこの文はA本には見えないようである。

抄物に關する國語學的專著としては前述の『室』がある。『室』は室町時代語法の用例についての、いわば辭書的存在として利用されているが、この書の資料となつた抄物のほとんどは江戸時代の版本であるので、室町期の古寫本との間に時に異同を免れない。その重要なものについては今までに大塚氏が述べられ(誤讀・二つの場合)——『國語國文』36年4月、その他)、わたくしも觸れてきた(「中世の謎について」——『佛教大學研究紀要52』43年3月、など)。なお今後指摘されるものが出て來るであろうが、大塚氏が最近「詩學大成抄とことば」(『國語國文』43年9月)の中で『室』一三七・一三九頁の用例に觸れておられることに關して、一言付加しておこう。湯澤博士が引例された中の「お……やる」の四河入海の用例が東福寺本では拗音でないことを氏は述べられたが、蒙求抄の用例も兩足院本では左の傍線部のように「ア」とあつて「ヤ」ではない。

大牢テヲマツリアツタソ(中の下3ウ)

また、湯澤博士の引かれた「お」をもたない「……ある」の用例も次のように記されている。

煮テヲコロシアラウトモ(陽明文庫藏蒙求抄、五)

灯ヲハシヲトホシアルナソ(兩足院藏四河入海、三本。東福寺本にも「ヲ」がある)。

天下ヲ取トヲ、モヤアルカト云ソ(兩足院藏蒙求抄、中の下21オ)

『室』一三六頁に蒙求抄から引例の「代々公ニナリタイト思イアルカ」も、兩足院本では「ト思ヒ」とあつて、「思」の右上の「ヨ」を「御」の意を示すものと受取ることができる。しかし兩足院本にも「お」をとらない例が次のように見られる。

光武ノ親類ニハナレタヤウニカナシウ思ヒアツタソ（中の下3ウ）

周易抄では左のように「御」をとる。

王ノ我ト御出アツテトラヘラレハ從ハウソ（A二33オ。B 24オは「御出デアツテ」）

太子ノハ主格ノ父ヲ御ノロイアルト云ソ（A二25オ。Bも同様）

なおA本の「御座アル」が、B本で（㊸も）「御入アル」となつているところがある。

カウ王者ノ御座アルホトニ王モ萬民モ不憂ゾ（A六1ウ）

カウ王者ノ御入アルホトニ王モ萬民モ不憂ゾ（B六1ウ）

ただし左の例ではA本もB本も「御座アル」である。

門ヲトデテヒツコウデ御座アルゾ（B三14ウ）

謙讓動詞の「マイラスル」が、B本で一個所「マラスル」のようになつているところがある。

虞人ガ養物ノナイ時ハカリハ狩ノヨシテマラセツナンドスルゾ（B六18ウ）

A本や㊸では「カリヲシテマイラセツナントスルソ」とあり、またB本でも左例ではA本や㊸と同様に「マイラスル」とあるので、右の「マラセ」もあるいは「イ」の誤脱かも知れない。

士タル者ガ羊ヲ刳テ^サ厖ヘマイラスルニ……（B五48ウ）

周易抄は資料の性質からか、敬讓表現が比較的少なく、確論をなすには困難である。

版本と古寫本との抄文の相違に基づく異見ではなしに、『室』の誤植・誤脱に類するものを氣づいた範圍で示そうとすることも、『室』の利用度が大きいがゆえに、あながち無益ではなからう。漢數字とアラビヤ數字とは『室』の頁と行とを示し、↓はその下のように訂正されるべきことを意味する。

〇一二 7 史記索引序↓史記案隱序

〇一六 8 刀筆吏↓刀筆史(八ほんとうは「吏」が正しい。兩足院本は「吏」。寛永版は「史」と誤植)

〇三五 4 同、八ノ一、セウ↓同、八ノ一、一セウ

〇三五 10 同、五、八オ↓蒙、五、八オ

〇五九 12 四河、二ノ一、一九ウ↓四河一一ノ一、九ウ

〇五九 13 二五ノ四、三一↓二五ノ四、三一オ

〇六二 8 イツマデ榮フベキゾ↓イツマテカ榮フベキゾ

〇一〇一 8 四河、八ノ一、三二ノ三↓四河、八ノ一、三二オ

〇一一六 11 「所領ヲ取セテブゲンシヤニナサレイ(同、三、一三ウ)」は、『室』三四〇13の「所領ウ……三、一二ウ」と同じものと思われる。

〇一四八 15 花ト云へハ聞テ↓花ト云へハ開テ

〇一五六 14 カウ禱ラレタニヨツテ↓カウ禱ラレタニヨツテカ

〇一六九 12 四河、四ノ七、四六オ↓四河、七ノ四、四六オ

- 一九二 16 「手ナ物ヲ失スルカ如ク（四河、二四ノ二、六一オ）」は該當個所に用例が見あたらない。
- 二〇六 10 蒙求、一、序三ウ↓蒙求、一、序四ウ
- 二二五 6 消防か↓焼亡〔これは誤植訂正でなく見解の相違〕
- 二三九 14 四河、五ノ二、四三ウ↓四河、六ノ二、四三ウ
- 二五八 10 コテヘラレウ↓コラヘラレウ
- 三〇五 6 「傳ノ書キタイト思フカクセソ（蒙求、七、三ウ）」は該當個所に用例がない。
- 三一九 13 合、二、二七ウ↓同、二、二七ウ

（昭和43・11・30稿）

〔補記〕

元禄十五年版『倭版書籍考』（辛島宗意著、十卷）が國書刊行會の『解題叢書』に收められているが、卷五の「醫方大成論」の個所に「越前一柏の鈔」（四五三頁）と見える。大塚氏の引かれた月舟の『幻雲文集』には「關東一柏震上人」（『續群書類從十三上』四一三頁）とあり、兩者が同一人か否かは今後の研究に待つ。